

第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録 -陸軍登戸出張所開設80年-」記録 -展示-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 椎名, 真帆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21296

第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録—陸軍登戸出張所開設80年—」記録 展示

椎名 真帆

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに—少女が残した登戸研究所の記録『雑書綴』について

『雑書綴』は登戸研究所でタイピストとして働いていた関コトさん（1925～2013）が個人的に保管していたもので、1941（昭和16）年～1944（昭和19）年に登戸研究所で作成された約1,000頁の書類の綴である。多くは庶務的な書類で、極秘印が押された書類は含まれないが、敗戦時に登戸研究所の書類や研究の記録はほぼ全て焼却されたため、『雑書綴』は登戸研究所の実態を現在に伝える貴重な資料である。



図1 『雑書綴』（小林郁久氏所蔵）

『雑書綴』は現在もコトさんのご家族が大切に保管している。当館第三展示室では複製を常時閲覧できるが、今回は当企画展に際し、ご家族のご厚意により、2019年11月20日～12月25日、2020年1月11日、2月29日～会期終了の期間で実物を展示した（3月4日より、新型コロナウイルス感染症対策のため休館）。

なお、本稿中の『雑書綴』等紹介資料のうち、将校級を除く勤務員や関係者名は伏せている。

第一章 少女と『雑書綴』

（1）記録を残した少女の横顔

①青春の日々と登戸研究所

登戸研究所でタイピストになったコトさん

『雑書綴』を綴ったのは関コトさんという少女であった。コトさんは15歳（満16歳）で登戸研究所第二科に採用されたため、



図2 研究所内でのコトさん（左）
撮影時期不詳（小林郁久氏所蔵）

青春時代が登戸研究所の思い出と重なる。コトさんは登戸研究所に通いながら夜学のタイピスト養成学校へ通学し、のちに第二科専属のタイピストになった。登戸研究所では夜学通学が奨励され、コトさんをはじめ多くの人が昼は研究所で働きながら夜は都内の学校に通っていた。

1925 (大正 14) 年	6月7日	川崎市内で誕生
1940 (昭和 15) 年	3月	川崎市生田尋常高等学校卒業
	4月	15歳で登戸研究所に採用、第二科の庶務課に配属
	この頃	日中は登戸研究所で働きながら夜学(タイピスト養成学校)に通う のちに第二科専属タイピストになる
1945 (昭和 20) 年	8月15日	敗戦、直後から書類焼却の残務処理作業
	9月中旬	第二科庶務科の残務処理終了、『雑書綴』を持ち帰る

表1 コトさんの年表(筆者作成)

コトさんの一日

登戸研究所の始業時間は8時30分、勤め始めたころは午後4時に早退し、渋谷にあったタイピスト養成学校に通った。タイピストになってからは翌日までに仕上げるよう依頼のあった書類を完成させるため深夜1時頃まで残業することもあったという。

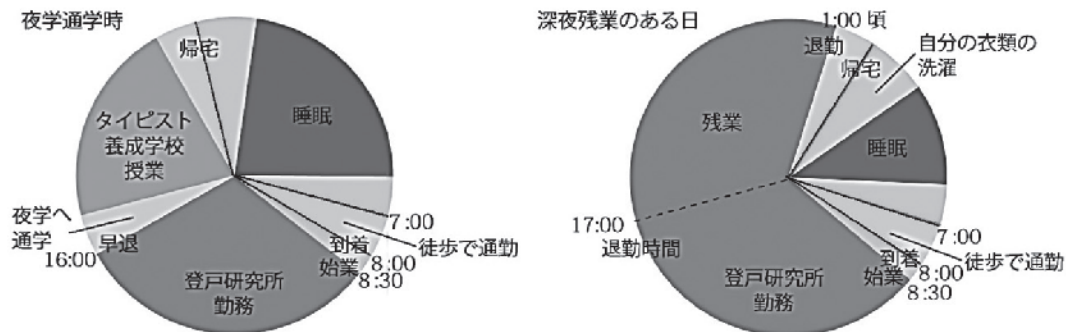


図3 コトさんの一日(川崎市中原平和学級編『私の街から戦争が見えた』ほかより筆者作成)

勤務のきっかけと必死に練習したタイピング

コトさんは、登戸研究所のことは「軍事のことをやっている」とボヤッとは聞いていたが、勤めていた親戚に誘われ「試験に受かったので」特別な動機もなく勤め始めたという。

しかし、少しでも早くタイプ技術を上達させたい、と必死な思いで練習し、その成果や見本を一枚一枚綴り続けた。それが『雑書綴』である。綴りは4年で約1,000枚にもなった。仕事時間外も練習として幼馴染への私信(本稿図8)を打ったこ

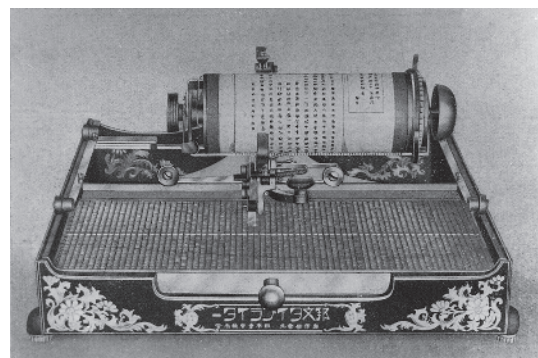


図4 初期の和文「菅沼タイプライター」写真(個人蔵)コトさんが使用していたものはこの後継機と思われる。装置手前、1,000~2,000文字もの活字から一文字ずつ選び印字する。タイピストには活字の配列を覚え速く打つことが求められた。

ともあった。その手紙には、お国のために、と努力を惜しまなかった16歳の少女の姿が浮かぶ。コトさんは、「皆でひとつの目標を目指しているんだ、という緊張感、充実感があり、若かったせいもあるのか、苦には感じませんでした。」⁽¹⁾と回想している。コトさんの回想は川崎女性史編さん委員会編『多摩の流れにときを紡ぐ—別冊聞き集』(ぎょうせい、1990年)にも掲載されている⁽²⁾。

②『雑書綴』が残った理由

秘密厳守を徹底された登戸研究所では終戦後も徹底的に証拠隠滅が図られた。では、『雑書綴』はなぜ現代まで残ったのだろうか。

理由1) 少女の青春の宝物

新米タイピストとして働き始めたコトさんは、文字配列が難しい和文タイプの打ち方や書式を早く覚えようと、自分がタイプした様々な文書の副本を綴り、見本としていた。

多感な青春時代を捧げたタイプの練習記録である『雑書綴』はコトさんの宝物であった。

理由2) 門衛による持ち出し許可

敗戦と同時に、特殊研究をおこなっていた登戸研究所にはすべての書類や記録の処分命令が下され、コトさんも一ヶ月ほど残務処理に通った。退職にあたり、コトさんは「五年間の精魂こめた仕事の思い出を持っていたい」と文鎮や書類箱と共に『雑書綴』を持ち帰ろうとした。門衛には一度、持ち出し禁止であると咎められたが、仕事の思い出に、と願い出たところ許可された⁽³⁾。

コトさんの人柄や仕事ぶりが垣間見られる資料

【〇頁】の表記は当館第三展示室に展示している『雑書綴』(複製)のページに対応する(以降同様)。



図5 コトさん(左)と同僚(小林郁久氏所蔵)

「昭和20、5月 登戸研究所 薬科花島にて」とアルバムに記されている。登戸研究所も分散疎開を始めた時期であり戦況は厳しかったが、つかの間の休憩時間に見せる10代の少女らしい明るい笑顔である。



図6 『雑書綴』資料①【608頁】

コトさん自筆の絵

(小林郁久氏所蔵(以降、『雑書綴』資料同じ),資料館撮影)
コトさんは『雑書綴』を戦後も嫁ぎ先へ持参し、大切に保管していた。絵を描くことが大変得意で、『雑書綴』にも自筆の絵が綴られていた。

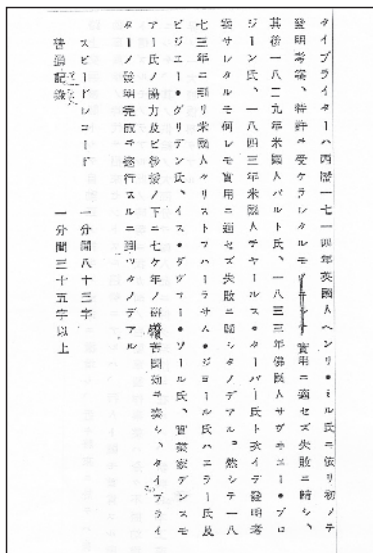


図7 『雑書綴』資料②【279頁】

タイプ練習文書

日付不明。コトさんがタイプ練習用に打った文章か。タイプライターの歴史と有用性について書かれている。

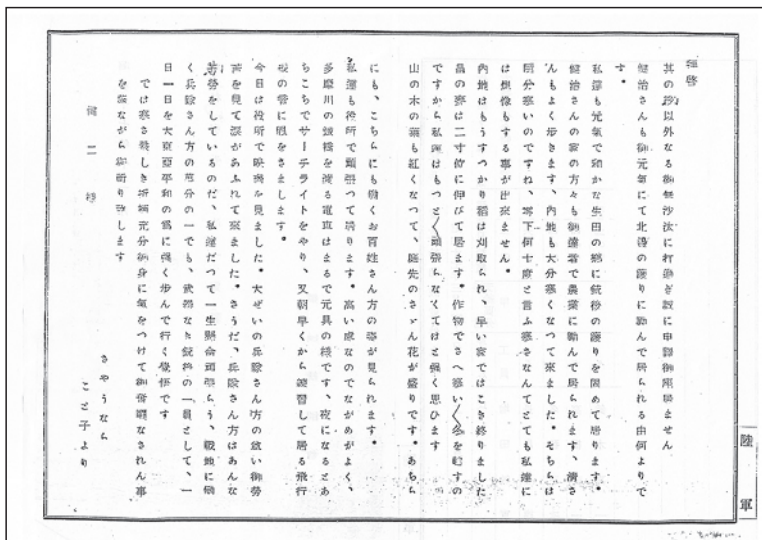


図8 『雑書綴』資料③【66, 67頁】

タイプ練習用「私信」

日付不明。コトさんがタイプの配列になれるための練習文書。内容は戦地に赴いている隣家の幼馴染にあてた手紙。文中から、研究所のことを「役所」と呼んでいることが読み取れる。

(2) 市民の活動と『雑書綴』

市民の活動から始まった登戸研究所の調査

1980年代後半、川崎市中原区で川崎市教育委員会主催の市民講座「川崎市中原平和教育学級」が開講された。「市民が主体的に地域の歴史を学び戦争体験を伝え語り継ぐ」という活動目的のもと、「登戸研究所」が取り上げられた。市内在住の元登戸研究所勤務員らの協力も得て、法政第二高校教諭(当時)の渡辺賢二らによって調査が始まった。

1989年2月、登戸研究所の実態調査として、元勤務員を対象に渡辺らはアンケート調査を実施する。得られた27通の回答のひとつに、関コトさんのものがあった。

「私はタイピストをしておりましてので、今でも^[ママ]部厚く当時の資料を持っており、年金受給者に証明書となるものをさしあげています」

この「当時の資料」が『雑書綴』であった。

コトさんの葛藤と決断

コトさんはそれまで登戸研究所や『雑書綴』のことを自ら語ったことはなかった。関係者へのアンケートが届き、秘密厳守が徹底されていた登戸研究所の『雑書綴』の存在に触れてよいものなのか当初コトさんは悩んだが、少しでも役に立てば、との思いで『雑書綴』を持っていると回答した。それでもなお『雑書綴』は公開してはいけないのではないか、という心配は消えなかった。しかし、戦後40年以上経過しており、罪にはならないだろう、という家族の言葉に背中を押され、コトさんは『雑書綴』の提供を決めた。

この頃には各メディアで当時の責任者が登戸研究所について語り始めていた。こうした背景もコトさんが『雑書綴』の提供を決めた理由の一つとも考えられる。

1964年 (昭和39)	映画	『帝銀事件 死刑囚』(熊井啓監督、日活)	「帝銀事件」での使用薬物との関係が疑われ、劇中に登戸研究所が登場
1981年 (昭和56)	テレビ	「ニセ札を造れ 中国法幣偽造作戦 昭和16年」(『NHK 歴史への招待』)放映	元登戸研究所第三科長 山本憲蔵 出演
1984年 (昭和59)	書籍	山本憲蔵『陸軍贋札作戦』(現代史出版会)出版	1981年のテレビ番組の反響により出版された山本の書籍を契機に元登戸研究所勤務員有志が集うようになり、10月、「昭和59年版 登研会名簿」完成 →この名簿をもとにジャーナリスト 斎藤充功が関係者へ取材開始、『謀略戦』執筆へ
1987年 (昭和62)	書籍	斎藤充功『謀略戦 ドキュメント 陸軍登戸研究所』(時事通信社)出版	
	テレビ	「帝銀第4弾 何が飛び出す再審模擬裁判!! 今衝撃の証言」(日本テレビ『11PM』)放映	元登戸研究所第二科第一科長 伴繁雄 出演
1988年 (昭和63)		川崎市中原平和教育学級が登戸研究所を取り上げ、渡辺らの調査が始まる	
1989年 (平成元)		元勤務員へのアンケート調査実施、『雑書綴』が提供される	

表2 登戸研究所の主なメディアへの登場から『雑書綴』提供に至るまでの動き
(花岡敬太郎「映像メディアにおける登戸研究所の紹介状況」(駿台史学会編『駿台史学』第141号, 2011年)ほかより筆者作成)

その他、第一章 実物展示資料



図9 勅諭下賜五十周年^(年)記念 文鎮
(小林郁久氏所蔵)

表(左), 裏(右)。
『雑書綴』とともに持ち出され、コトさんが大切に保管していた。
裏面に「昭和七季十二月 陸科研」とある。「陸科研」とは陸軍科学研究所の略称。1941(昭和16)年5月までは登戸研究所の上部組織だった。

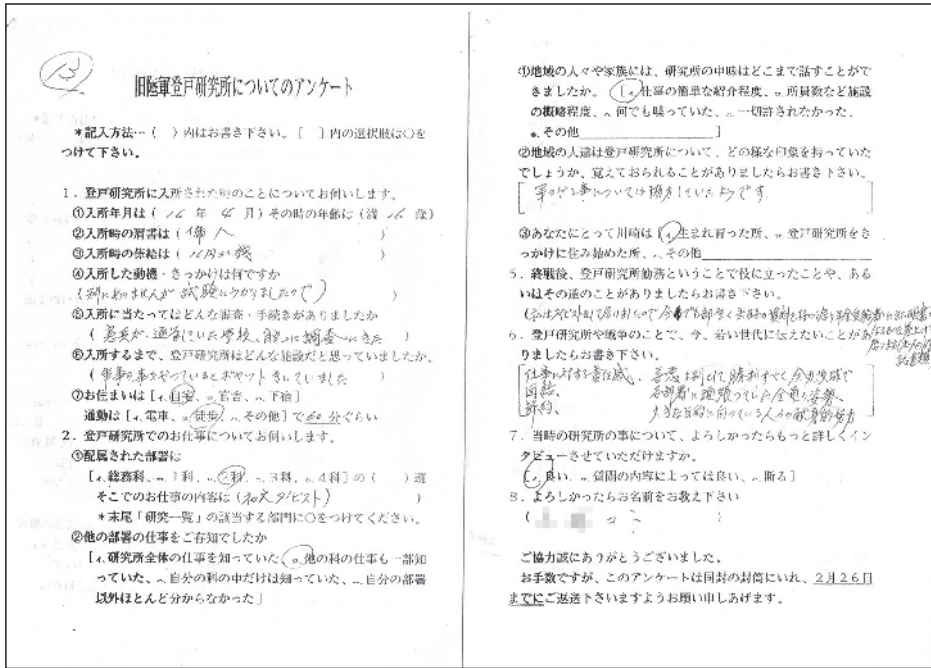


図 10 中原平和学級アンケートへの関コトさんの回答（資料館所蔵）
コトさんはこのアンケートで『雑書綴』の存在を初めて公にした。

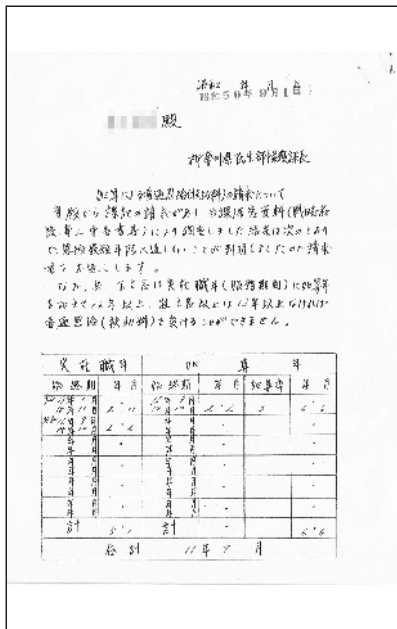


図 11 普通恩給請求書類（資料館所蔵）
陸軍登戸研究所での在職の記録は残されなかったため、県の民生部より恩給の加算請求対象にならないと回答された通知文。

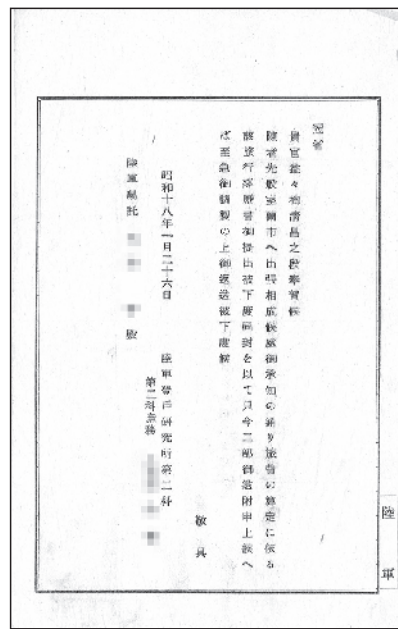


図 12 出張行程表提出依頼状（資料館所蔵）
『雑書綴』から切り取られたページ。年金の加算請求のため、登戸研究所に在籍した証明として使用された。使用者である元登戸研究所勤務員がコトさんから譲り受け、そのまま手元に置いていた。この元勤務員は左の「普通恩給請求書類」申請者とは別の人物。

ほかに、本誌 p. 91, 図 5 渡辺賢二氏作成「『雑書綴』メモ」も展示した。

第二章 『雑書綴』の時代と登戸研究所の歴史

調査により、『雑書綴』には1941（昭和16）年から1944（昭和19）年にかけての書類が綴られていることがわかった。

ここでは、その当時の登戸研究所の時代背景を見ていく。

（1）登戸「出張所」への改編まで—『雑書綴』以前—

1914（大正3）年に勃発した第一次世界大戦では、初めて化学兵器＝毒ガスが使用された。日本も科学技術を総動員し毒ガス関係を含む基礎研究を行うため、1919（大正8）年、陸軍科学研究所（陸科研）を開設した。陸科研には軍人でありながら陸軍員外制度で旧帝国大学理工学系専攻を修めたエリートや旧帝国大学卒の優秀な研究者などが集められた。

陸科研にはその後、秘密戦資材の研究開発を行う篠田研究室（1927（昭和2）年）、登戸実験場（1937（昭和12）年）と、のちの登戸研究所となる部門が生まれる。（篠田研究室はのちの登戸研究所所長、篠田^{りょう}鐸が主任を務めた。）

1937年以降日中戦争の泥沼化は個人謀略用兵器などの秘密戦兵器開発を拡大させ、淀橋区（現・新宿区）百人町の陸科研内では手狭になった篠田研究室が、1939（昭和14）年に生田にあった電波兵器研究の登戸実験場にやってきた。同時期、参謀本部主導の対中国偽札謀略部門も設置された。このため登戸実験場は「陸軍科学研究所登戸出張所」として改編され、軍の要望に従い研究内容が拡大する。陸軍登戸「出張所」となったことは、同時に登戸研究所が、陸軍の科学謀略の総合研究機関となった大転換点でもあった。

また、この頃から第一科の電波兵器研究は実用化に至らず勢いを失う一方、第二科のスパイ兵器・生物化学兵器開発が実績を上げ、研究項目はさらに増えていった。

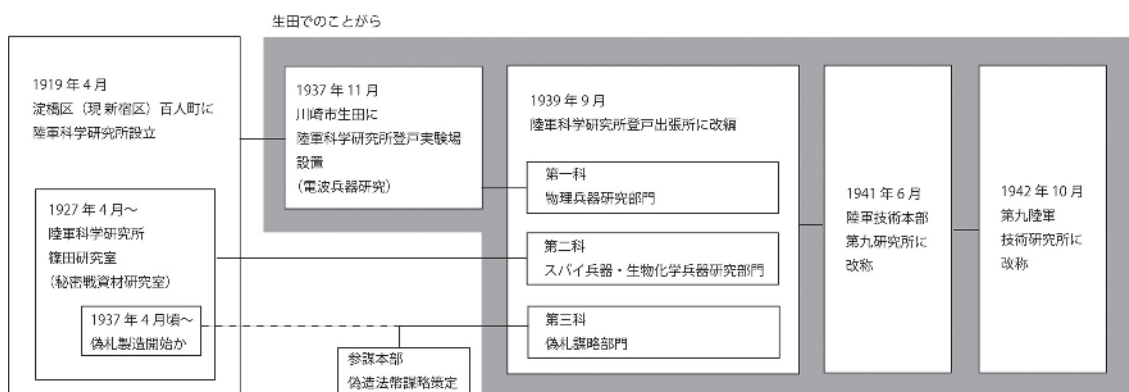


図13 登戸研究所改編の流れ（筆者作成）

通称で「登戸研究所」と呼ばれ始めたのは「登戸出張所」に改編されてからである。

(2) 『雑書綴』の時代 —1941年から1944年—

①戦局と登戸研究所

戦局の推移

中国大陸では1939（昭和14）年のノモンハン事件以来、関東軍とソ連軍の緊張が続いた。太平洋上では、拡大していた戦線は1942年末をピークに以降後退した。秘密戦要員への教育を担っていた陸軍中野学校も諜報活動要員からゲリラ戦要員の短期養成へ方針転換した。1944（昭和19）年半ばにはマリアナ諸島が米軍により陥落、東京など本土都市部への、B29による直接攻撃が開始された。

このような時代背景のもと、アカデミックで穏やかな雰囲気であったといわれる登戸研究所にも研究内容の変化や規律の引き締めといった変化が生まれた。

第二科は憲兵や、陸軍中野学校で秘密戦要員教育を受けた特務機関員らが使用する資材を開発、提供していた。特に関東軍ではソ満国境での特設憲兵隊による無線探査機など、防諜・諜報兵器の整備がいち早く整えられた。

1943（昭和18）年初頭からの戦線後退とともに、南方への兵力の増員や、陸軍中野学校のゲリラ戦要員養成が進み、秘密戦の方法が変化した。ゆえに防諜・諜報活動用の兵器よりも後方攪乱兵器（缶詰型爆弾・焼夷剤）の大量生産に重点が移った。

変化する秘密戦兵器開発と登戸研究所の様子

登戸研究所においても、「科学の基礎研究」よりも「個人謀略用兵器の生産」が期待されるようになる。個人謀略用「化学兵器」（陸軍では主に毒ガスを指すが、発煙剤・焼夷剤・火炎剤も含まれる）⁽⁴⁾の研究環境が整えられていく。

『雑書綴』からもこの流れがわかる。たとえば、1943（昭和18）年には第二科長に化学専門家の就任を要望するものや、南方用の秘密戦兵器開発や化学兵器研究の環境整備に関する書類がつくられている。防空対策に関する書類や、登戸研究所が「最終決戦兵器」として勢力を注いだ風船爆弾への第二科による研究協力を示唆する書類も見られるようになる。

②研究者の武官補充特例

陸軍技術部の創設により、1941（昭和16）年、軍属（文官）として陸軍に採用された研究者が、特例として武官に補充されることが

図14 『雑書綴』資料④【681, 682頁】「第二科防空班編成表」日付不明。科長が山田大佐とあることから1943年9月以降のもの。空襲に備えて防空壕ごとの「対空監視員」、「消火担任者」などが読み取れる。

決定された。

陸軍の研究所では、士官学校を卒業した職業軍人（武官）と、研究職として軍に採用された軍属（文官）が机を並べ研究を行っていた。通常、各科長には陸軍中佐級が就任していた。登戸研究所長・篠田^{りょう}鐮，第一科長・草場^{すえき}季喜や第二・四科長・畑尾正央（第二科長としては二代目）は武官であったが、畑尾の後任の第二科長・山田桜や第二科第一班長・伴繁雄といった研究者・技術者らは文官として採用されていた。

元来、軍の中では武官と文官の線引きは厳然としていたが、山田桜ら研究者の多くがこの特例で兵技将校，すなわち武官となった。1944（昭和19）年8月，兵技将校は技術将校と改められ，山田桜は技術大佐，伴繁雄は技術少佐となった。

③名称の変遷からさぐる登戸研究所の昇格

『雑書綴』から登戸研究所名称の変遷をたどると次の表のようになる。

登戸研究所正式名称	『雑書綴』での年月日	通関証明書以外の各種書類	税関長宛通関証明書発行者
1937年11月～1939年9月 陸軍科学研究所登戸実験場		記録なし	
1939年9月～1941年6月 陸軍科学研究所登戸出張所			
1941年6月15日 ～1942年10月 陸軍技術本部第九研究所	1941年8月14日～ 1942年6月20日	陸軍技術本部登戸出張所， 陸軍登戸出張所，登戸出張所	陸軍技術本部（長）
	1942年6月22日～ 8月24日		記録なし
	1942年9月7日	登戸研究所	
1942年10月15日 ～1945年8月 第九陸軍技術研究所	1942年9月17日～ 10月21日	陸軍技術本部登戸出張所， 陸軍登戸出張所	
	1942年10月28日以降	陸軍登戸研究所，登戸研究所， 陸軍兵器行政本部登戸研究所	陸軍登戸研究所（長）

表3 『雑書綴』上の名称表記（筆者作成）

1941（昭和16）年6月，「陸軍科学研究所登戸出張所」から「陸軍技術本部第九研究所」へ昇格した登戸研究所であるが，その後約1年半，「研究所」と書かれた書類は『雑書綴』にはあまり見られない。1941年施行の「陸達第41号 昭和16年6月14日 陸軍技術本部業務分掌規程」では登戸研究所は「陸軍技術本部第九研究所」となったはずだが，秘匿されたため規程から除かれており「研究所」として明文化されていない。

『雑書綴』の，税関長へ提出する「通関証明書」に注目すると，1942（昭和17）年10月に「第九陸軍技術研究所」となった頃と同じくして，登戸研究所長名で発行されている。それまでは上部組織である陸軍技術本部長名で発行されていた。このことから，登戸研究所は名実ともに「研究所」として格上げされ，所長の地位も税関長と同等に引き上げられたことを示す。

なお、『雑書綴』の書類には正式名称「第九陸軍技術研究所」は一切使用されていない。

第三章 『雑書綴』が伝える第二科の研究と様子

『雑書綴』には何が綴られているのか

『雑書綴』の書類は、大きく分けて次の表のとおり3種類に分類できる。

基本となるのは関コトさんが働いていた第二科の庶務的な書類のうち、秘密指定のない文書の副本やタイプをミスした書類が書式見本として綴られている。165点、約1,000頁に及ぶ文書が作成された時期は、1941（昭和16）年～1944（昭和19）年である。

①研究に関するもの	②事務関係書類・第二科の様子を表すもの	③その他
化学兵器関係書類, 「官用品通関証明書」 軍用品未着問合せ, 研究中事故報告書, 工場見学報告書, 購入品関係書類, 資材借用証・受領証, 出張関係書類 など	「科内務巡視所見」, 「健康保護者取扱規程」, 「研究費支給書類関係」, 「登戸出張所教育規程」, 「不就業日支給金額表」, 「火元取締り責任者及同助手現況調査」, 「無施錠開放状況」 など	挿絵, タイプ速度記録, 活字仕様書, 練習文書, 東生田駅（現・生田駅）時刻表 など

表4 『雑書綴』の書類の内容（筆者作成）

『雑書綴』に綴られなかったもの

極秘文書をタイプする場合は原稿を担当した将校が付き添った。打ち間違えると全部分厚い焼却箱に入れられ、さらに南京錠をかけられて後日焼却場で燃やされた。

そのため、登戸研究所の書類で最も重要で極秘とされたものこそ『雑書綴』に綴られることはなかった。

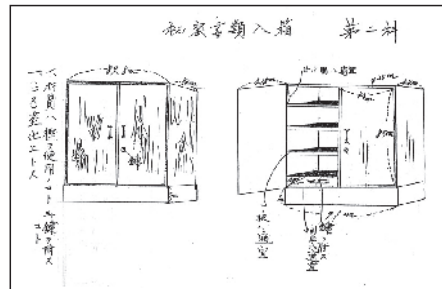
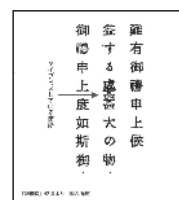


図15 『雑書綴』資料⑤【705頁】秘密書類入箱
日付不明。硬い檜材の使用や鍵をつけるよう指示されている。

『雑書綴』の資料を読み解く際の注意

タイプミスの書類が含まれるため、内容の誤りや誤字がある。ゆえに、書類の記述は他の資料などと併せて慎重に検証することが必要である。

図16 『雑書綴』資料⑥【42頁】
事務書類見本資料送付依頼書式（部分）
矢印の先がタイプミスをしている。



(1) 第二科の研究内容や役割を示す書類

第二科では各班の研究内容は次のように分担されていた。『雑書綴』の書類に記載されている人物、扱う薬品などから、どの班が行った研究であるのか分かるものもある。

班	中心メンバー	研究内容
庶務班	瀧脇重信技術大尉（班長）	
第一班	伴繁雄技術少佐（班長）	秘密インキ・オブラート紙・風船爆弾（材料研究）・気圧信管・焼夷剤・爆薬・毒性化合物など ⁽⁵⁾
第二班	村上忠雄技術少佐（班長）	毒物合成（蛇、植物など自然由来毒の兵器化）・犬迷い剤など
第三班	土方博薬劑大尉（班長）	毒性化合物・青酸化合物・耐水マッチなど ⁽⁶⁾
第四班	黒田朝太郎軍医中尉（班長）	細菌（炭疽菌） ^{たんそきん} ・対植物用細菌など
第五班	丸山政雄技術少佐（班長）	カメラ・写真関係全般
第六班	池田義夫技術少佐（班長） 松川仁技手	対植物用細菌・昆虫など
第七班	久葉昇獣医少佐（班長）	対動物用細菌（牛疫ウイルス）など

表5 登戸研究所第二科各班の研究内容（参考資料：『明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック』第5版, p.18）

以降、テーマに沿って、『雑書綴』の各ページを紹介する。

『雑書綴』に綴られている書類約1,000枚のうち本企画展で紹介できるのはほんの一部であるが、いくつかのテーマに絞り、登戸研究所第二科の実態に迫りたい。

なお、第三章で紹介する雑書綴各該当ページ（『雑書綴』資料⑦～⑴⑦）は、当資料館ウェブサイト上の第10回企画展記録に展示パネルほか資料としてPDFのアップロードを予定している（2020年10月以降）。

①研究毒物と枯葉剤用資材

『雑書綴』には資材の購入記録から、様々な研究内容が推測される。

- ・毒物（コルヒチン、イヌサフラン、アマガサヘビ毒）
- ・穀物害虫・病菌（ニカメイ虫、稲ワラ、小麦）

これらは、複数の購入記録が残っている。毒物は大変重要な研究課題で、種類や研究目的により、第二科の中でも担当班が細かく分かれていた。

『雑書綴』資料⑦【609, 610頁】「コルヒチン」原料植物入手方^{【尽力】}願度件

1944（昭和19）年7月29日付。現インドネシア・ジャワ島で栽培される植物からコルヒチンを抽出次第送付するよう依頼している。

コルヒチンはイヌサフラン科植物に含まれる猛毒である。身近に存在しており、現在でも毎年春先に行者ニンニクと誤食し死者が出ている。毒物の中で『雑書綴』に関係書類が登場する

のは1941（昭和16）年9月と最も時期が早い。以降、数度にわたり原料となるイヌサフラン球根の入手依頼の書類などが見られる。〔毒物合成：第2班〕

『雑書綴』資料⑧【407, 408頁】^{アマガサヘビ}雨傘蛇毒送付礼状

1943（昭和18）年1月7日付。アマガサヘビは台湾などに生息する猛毒を持つヘビである。この書類は蛇毒3グラムを送付してもらった台湾の熱帯医学研究所士林*支所への礼状であるが、併せて、さらに当分、年に20グラムを採取次第送付するよう依頼している。

〔毒物合成：第2班〕

※士林…現・台北市

『雑書綴』資料⑨【403頁】^{ニカメイチュウ}二化螟虫幼虫購入表

1942（昭和17）年、日付不明。二化螟虫は稲の害虫であるニカメイガ。登戸研究所はこの幼虫を空中散布した。二化螟虫幼虫は一度に約10,000頭発注されている書類もある。

元第二科勤務員松川仁は、手記「キノコ随想」（複写、資料館所蔵）でこの空中散布実験を中国の湖南省で行ったことを記録している。

なお、この研究は、現資料館の建物で行われたともいわれている。

〔昆虫使用の生物兵器：第6班〕

②化学兵器の研究

登戸研究所では「青酸」, 「ホスゲン」(窒息系毒ガス)をはじめとした毒ガスや、常温でも自然発火する危険のある「燐」などを取り扱い、化学兵器の研究を行っていた。

『雑書綴』資料⑩【65頁】化兵手当支給相成度件上申 1942（昭和17）年3月26日付

『雑書綴』資料⑪【245頁】危険作業従事現況調 日付不明

どちらも工員（陸軍研究所の技術系勤務員で最も低い身分）が危険作業として毒性の化合物を取り扱っていたことや危険手当は基本給に3～5%の上乗せされたことがわかる。

〔動植物由来毒物研究：第2班, 化学合成毒物開発：第3班〕

③化学兵器研究による事故

毒物抽出、兵器化などの危険作業がともなうため、当然、痛ましい事故も起こった。元勤務員の中にはびらん性ガスを浴び即死した者、爆発によって死亡した者もいた。『雑書綴』には凄惨な記録はないが、化学兵器研究に起因する事故を示唆する書類がある。

『雑書綴』資料⑫【585頁】 証明書 [本誌 P. 96 図 14]

1943(昭和18)年7月付。工員が毒薬合成中に気管支を侵され胃潰瘍となり、肺浸潤^[ママ]を併発したことが「ホニ号」⁽⁷⁾合成研究によるもの、と証明する書類である。

資料⑪「危険作業従事現況調」では、この工員は伴繁雄の班で「毒性化合物」研究を行い、その危険作業への加給率は3%であった。[「ホニ号」：第2班，第3班]

※肺湿潤…肺が炎症をおこし、膿などが浸み出ている状態

1943年頃には、研究内容の拡大に伴い、それまでの事故発生対応では不十分になってしまったのであろうか。それを危惧してか、『雑書綴』資料⑫の書類が出された2か月後、有毒物の事故発生時の具体的な救急治療に対する要望(同資料⑬)が所内の医務室宛に提出される。

『雑書綴』資料⑬【666-668頁】 救急治療に対する要望の件 [本誌 P. 94 図 9]

1943(昭和18)年9月3日付。登戸研究所が「青酸」^{フダ}、「ホスゲン」などの毒ガスや「河豚毒」^{フダ}、「コルヒチン」など有毒物を取り扱っていたことやこれらの毒物から想定される傷害状況に応じた細かな対処法が記載されている。これを提出したのは第二科長に就任したばかりの山田桜であった。山田は化学兵器に極めて精通していた。[毒性化合物：第3班]

備考	毒 薬		固 体	液 体	ガ ス および 蒸 気										区 分										
	嚙 下		接 皮 触 膚		吸 入										傷 害 状 況										
所内務規程第百十條による「空白」設備を医務室に於て成る可 迅速に設置せられ度	昇汞 ^[ママ]	硝酸銀	亜ヒ酸	燐	皮膚「空白」 ^ス	重フッ化カリ	チメチル硫酸	アニリン	ニトロベンゼン	ニトログリセリン	アンモニア	亜硫酸ガス	燐化水素	フッ化水素	臭素	塩素	フッ素	みどり剤	「空白」 ^ス 剤	一酸化炭素	ホスゲン	青酸	有 毒 物		
	「アルカロイド」	「アコニチン」	「コルヒチン」	「ストリキニシン」	「河豚毒」	「ナトリウム」	「硫酸」	「硝酸」	「塩酸」															摘 要	
	胃洗浄用具を含む		火傷治療		皮膚炎治療を含む 眼炎および皮膚炎治療を含む										結膜炎治療を主とす		咽頭炎治療を主とす		輸血を含む		同右および瀉血を含む ^[ママ]		人工呼吸具、注射等を含む		

左記
 当科の研究業務上左記有毒ガス、毒薬に対し之か救急薬剤および救急具に關し予め準備方相煩度

表6 『雑書綴』資料⑬より抜粋 第二科長・山田桜が医務室・高橋大尉にあてた、第二科で想定される有毒ガスや毒薬の事故対応の要望(原文は旧仮名遣)

④関東軍直轄部隊や満州国への資材

第二科の重要研究項目，防諜のための兵器開発

第二科は関東軍と密接な関係にあった。第二科が開発した捜査器材は，敵性工作員の検挙，満州国の治安維持のため関東軍で使用された。憲兵や関東軍に使用法などを直接指導するため，篠田鏝や伴繁雄も満州に出張した。満州の首都新京（現・長春）には，無線や科学の特殊任務を目的とした関東憲兵隊による特設憲兵隊が創設され，特にソ満国境では，無線の教育を受けた憲兵が防諜・諜報活動に従事した。

年 月 日	事 項
1919(大正8)年 4月12日	関東都督府改組により関東軍として独立 (司令部：旅順)
1931(昭和6)年 9月18日	満州事変始まる
1932(昭和7)年 3月1日	満州国成立（首都：新京）
1934年(昭和9)年	関東軍司令部，新京に移る
1937(昭和12)年 7月7日	日中戦争始まる
1939(昭和14)年 5～9月	ノモンハン事件
1941(昭和16)年 7月7日	関東軍特種演習 …対ソ戦を想定し兵力増員

登戸研究所が関東軍関係組織への秘密戦

表7 関東軍・満州国関連略年表（筆者作成）

資材提供を行っていたことは『雑書綴』からも裏付けられる。

関東軍，憲兵に関する展示資料

図17 進藤進編『日支国語辞典新辞林』
(研文書院，1941年)

この資料は著作権の確認が済んでいない資料のためインターネット公開をしていません。

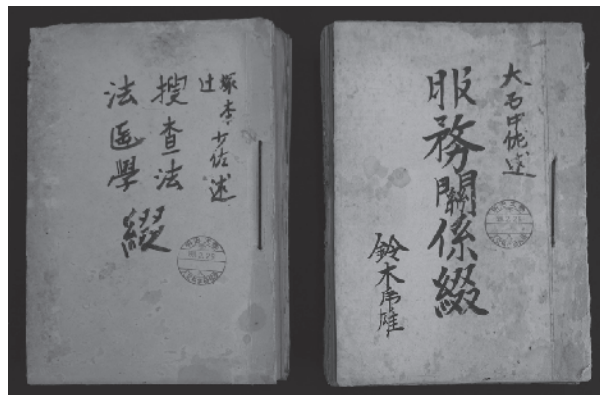


図18 憲兵関係資料表紙（資料館所蔵）

『捜査法・法医学綴』、『服務関係綴』はともに憲兵学校の教本として使用されていたもの。

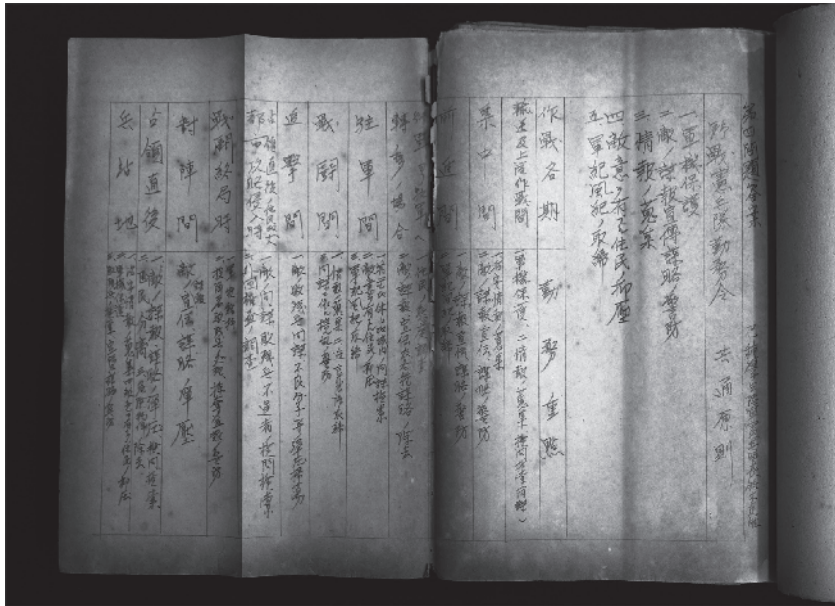


図19 憲兵関係資料『服務関係綴』（資料館所蔵）より野戦憲兵の活動についての課題の答案

「野戦憲兵隊勤務令 共通原則」として、

一、軍機保護 / 二、敵の諜報宣伝謀略の警防 / 三、情報の蒐集 / 四、敵意の有する住民の抑圧 / 五、軍機風紀の取締、とあり、憲兵には秘密戦要員として期待されていたことがわかる。また「作戦各期」における「勤務重点」も共通原則に則している。

『雑書綴』資料⑭【12頁】 満州第86部隊送付 官用品通関証明書

1941（昭和16）年12月8日付で、当時の登戸研究所上部組織である陸軍技術本部名で税関長宛に発行された文書である。

満州第86部隊は関東軍の新京特設憲兵隊のことで、敵の防諜活動に備え、無線探査と科学捜査や鑑識を行った。また、変装し、毒薬で個人謀略を行っていた部隊であった。

『雑書綴』には別紙は綴られておらず中身は不明であるが、この証明書にある官用品は謀略用毒物兵器であった可能性がある⁽⁸⁾。

表8 満州第86部隊の役割

(1939（昭和14）年8月1日設立当時、
参考資料：全国憲友会連合会編纂委員会編
『日本憲兵正史』（1976年）
第三～第六分隊は、のちに
関東軍憲兵隊司令部科学偵諜班となる。

第一分隊	無線探査
第二分隊	
第三分隊	指紋
第四分隊	法医・細菌
第五分隊	写真（赤外線望遠撮影，超小型カメラほか）・筆跡鑑定
第六分隊	思想・物理・化学（封書開封技術，秘密インク，軍用犬対策ほか）・電気

〈関東軍と直接やり取りしている書類〉

『雑書綴』資料⑮【284頁】 関東軍司令部 囑託 携行器材 官用品通関証明書

1942（昭和17）年6月20日付。登戸研究所開発の「赤外線フィルム」，「電流計」，「蓄電池」を，関東軍司令部の囑託職員が携行し持ち帰る際の証明書である。

赤外線フィルムは敵情視察に有用であり、また電流計と蓄電池は無線探査に必要な機材で、ともに防諜、諜報活動に使用したものと考えられる。〔赤外線フィルム：第5班〕

『雑書綴』資料⑯【337頁】 関東軍司令部送付 官用品通関証明書

1942（昭和17）年10月28日付。「コルク栓」と「試薬瓶」を「特殊兵器」と称して送付している。登戸研究所が戦場への秘密兵器、実験用器材供給基地でもあったことがわかる。『雑書綴』345頁にはこの「送付証」も併せて綴られている。

〈満州国とのやり取りがわかる書類〉

『雑書綴』資料⑰【405頁】 満州第247部隊送付 官用品通関証明書

1942（昭和17）年12月15日付。「充電器」、「真空管」、「タンガーバルブ」*、「通信機部品」を満州国ハルビンの満州第247部隊に送るための通関証明書である。満州第247部隊は関東軍特殊情報隊のことで、本部は新京にあった。ハルビンには出張所があり無線諜報や解読を行った。そのため、これらは無線諜報用器材の部品と考えられる。

ハルビンには以前から特務機関が置かれ、対ソ戦準備の情報を満州国内で収集する日本陸軍の秘密戦実行の中心地であった。

※タンガーバルブ…低電圧でも使用でき、真空管より電流容量が大きく、蓄電池の充電に適している部品。

『雑書綴』資料⑱【437, 438頁】 満州国治安部宛 請求書

1943（昭和18）年2月5日付。満州国治安部への「貿易資材委託調弁費」金3,115円50銭（現在の価値で約300万円）の請求書で、別紙内訳書が付属している。

満州国治安部は満州国内の軍政と警察を司り、治安維持を担った。関東軍は満州国へ次官級要職などに日本人を送り込み、治安部でも大きな発言力を持った。

品目の「クロナキシー測定器」は神経や筋組織の興奮度を測るものである。「電気心動曲線計」とともに、登戸研究所でも開発されていた「ウソ発見器」用器材であった可能性がある。

⑤中支那防疫給水部との関係を示す資料 [本誌 P. 96 図13]

『雑書綴』資料⑲【456頁】 資材効力調査成績 受領証

1943（昭和18）年2月20日付。「中支那派遣軍防疫給水部」（本部・南京）は、別名を「多摩部隊」や「栄第1644部隊」といった。表向きは中支派遣軍の防疫などを担当したが、実態として細菌兵器の大量生産も行っていた。1941（昭和16）年に登戸研究所から伴繁雄らが南京に出張した際は、毒物の人体実験を行った。

この受領証のみでは登戸研究所が効力調査を依頼した資材、受取った報告の詳細は不明であるが、中支那防疫給水部の実態を踏まえると、細菌や毒物といった秘密戦兵器に関するものではないかと推測される。

中支那防疫給水部の初代部隊長は第731部隊長 石井四郎が兼任しており、この受領証の受取人 太田澄は石井の後任にあたる。

⑥南方部隊との関係を示す資料

『雑書綴』資料⑳【416頁】軍用品（木箱）未着の問合せ

1943（昭和18）年1月12日付。登戸研究所^{ぎて}技手より、広島市宇品町（広島港）の運送会社に、「岡第1601部隊」からの未着の軍用品について問合せしている。

「岡第1601部隊」とは「南方軍司令部参謀課」（本部・シンガポール）の秘匿名である。ビルマ南西部、蘭印バリ島、スンバワ島、東チモールなどの詳細な兵要地誌図⁽⁹⁾を作成した。1942～45（昭和17～20）年の兵要地誌班長は陸軍中野学校の教官を務めたこともある西村

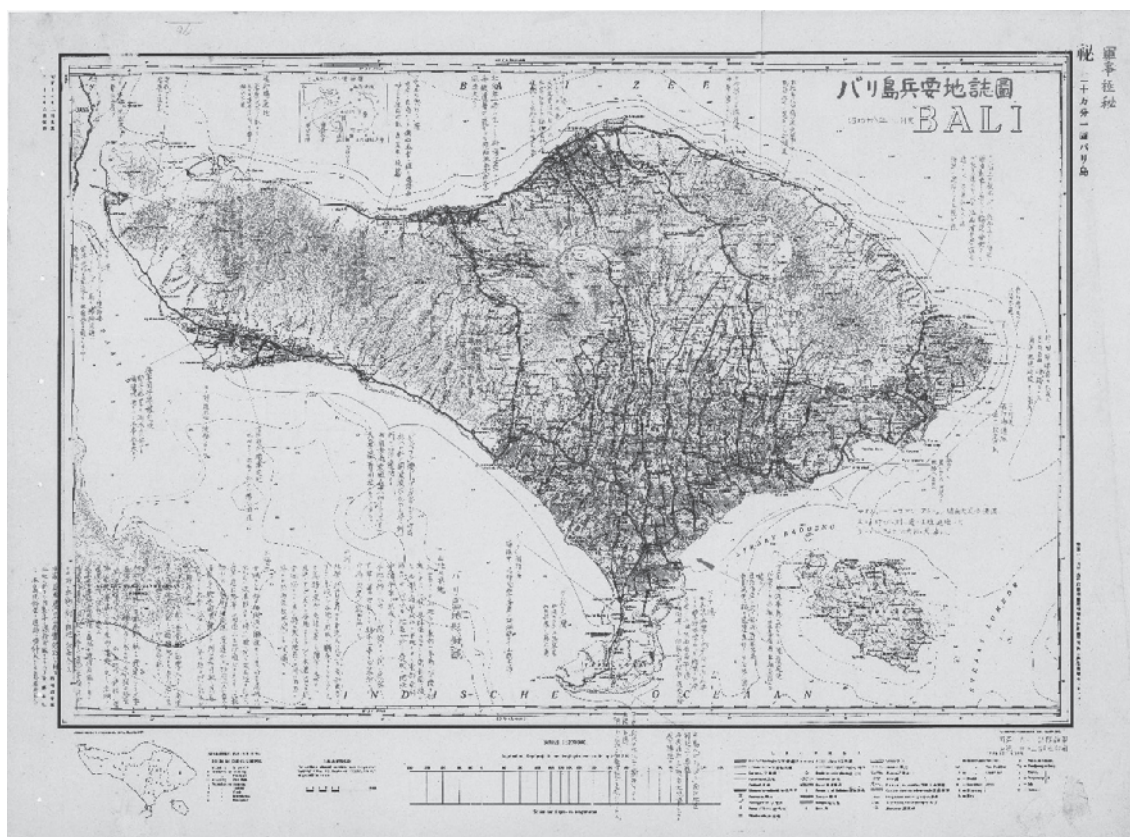


図20 岡1601部隊調製/治1602部隊印刷『バリ島兵要地誌図』（複写、お茶の水女子大学附属図書館所蔵）

昭和17（1942）年6月発行 参謀本部陸地測量部作成20万分一のバリ島の地図に、南方軍の「岡1601部隊」が現地調査で得た情報が朱字で加筆されている。軍事情報の追記により「軍事極秘」に改められている（枠外右上）。印刷の「治1602部隊」は「岡1601部隊」の所属部隊。左下欄外にReproductiebedrijf topografische dienst, Batavia 1935とあることから、1935年発行のオランダの会社製の地図をベースとしていることがわかる。http://www.lib.ocha.ac.jp/GAIHOZU_Web/htmls/15054.htmlより閲覧可（2020年9月4日現在）。

兵一少尉（当時）であった。1944（昭和19）年7～9月は陸軍中野学校卒業生も兵要地誌図の研究に従事している⁽¹⁰⁾。

⑦南方用兵器・資材

登戸研究所では、1941（昭和16）年以降、南方での秘密戦資材の研究を行っていた。1942（昭和17）年末までに日本は南方へも勢力範囲を広げ、現在のミャンマー南部やスマトラ島、南端はオーストラリアのすぐ北にあるニューギニア島の一部に到達していた。

『雑書綴』に見られる大量の牛肉などの購入記録は、元登戸研究所勤務員の北沢隆次^{たかじ}によれば、南方に送る携帯用保存食糧開発のためであったという⁽¹¹⁾。南方進軍にあたり、登戸研究所でもその目的に特化した秘密戦器材の開発が必要とされていたことがわかる。

密林では熱病のマラリアも大敵である。マラリア原虫を媒介する蚊の対策に日本軍は悩まされ続けていたため、蚊取り線香やマラリア予防薬の研究も熱心に行われていた。

また、密林で軍用犬を活用する研究が行われ、『雑書綴』には、その実験報告も綴られている。

〈携帯用保存食〉

『雑書綴』資料②1【56, 285頁ほか】 肉受領内訳書

研究用牛肉，鶏卵配給券交付相成度件申請

1941（昭和16）年10月から1943（昭和18）年まで、配給券を使用するなどしながら大量の牛肉や卵を購入した記録が残っている。ひと月に4貫（＝約15kg）を一度に購入したこともあったようである。携帯用保存食糧の研究のためであろうか。

また、『雑書綴』【553頁】は水産工場見学に対する礼状である。水産物を使用した保存食も検討されていた可能性がある。

〈マラリア対策〉

『雑書綴』資料②2【616頁】 学位論文 化学防蚊剤の研究 複写送付依頼

1944（昭和19）年8月22日付。長瀬誠は理化学研究所の研究員で、同年5月、「除虫菊花燻煙の殺虫成分に関する研究」で東京帝国大学より博士号を授与されている。登戸研究所としても「此種の研究に関係致し居り是非内容を詳細に承知」したいとあり、防蚊剤研究に対する関心の高さがうかがえる。

1944年8月といえば南方への兵力が増員された時期であり、防虫対策には一層重点が置かれた。

『雑書綴』資料⑳【719-726頁】『キニーネ』の合成

1942(昭和17)年9月7日付。陸軍軍医学校の乙種学生への研究会講義の書き起こしである。講師は登戸研究所嘱託研究者で、資料から陸軍軍医学校出身とわかる。この講師によれば、一度、マラリアの薬である「キニーネ」の化学合成に成功したものの、高価であったため、大量生産に適した安価なものは未完成であった。そのためか、この講演では「キニーネ」発見以後の歴史に終始している。

〈携帯口糧・防蚊剤の工場調査報告〉

『雑書綴』資料㉑【150頁-172頁】携帯口糧並に防虫剤に関する会社、工場調査報告

1944(昭和19)年3月19日登戸研究所第二科が調製したもの。関西における食品工業の現況調査と食品・防虫の識者からの意見をまとめている。

13からなる報告を表にすると次のとおり。

	主要調査項目	報告内容	
其の一	栄養試験	脂肪食	脂肪増加食の脂肪最大摂取量研究 大豆油と米の腹持ち良好だが調理誤れば継続不可能と結論
		大豆食	大豆の栄養価研究と主食にする方法
		学童栄養食パン	給食用高カロリー食パンの研究
		携帯口糧の注意点	日本兵対象であればパンより餅を、またカルパス(ドライソーセージ)を利用すべきとの結論
其の二	凍豆腐	携帯口糧として考慮すべきだが、味の改良必要と結論	
其の三	落花生蛋白	肥料用落花生粕(かす)食品化の検討	
其の四	合成酒	甘藷(サツマイモ)由来の合成酒製造の成功	
其の五	航空糧食	固形卵黄・ビタミンの製造途上、肉節[にくぶし、か]試作報告	
其の六	食品化学	海水脱塩材原料を研究中	
其の七	デンプン食糧	軍用食糧「餅の素」、「クズ餅の素」、「飴の素」の紹介、味品質ともに優良、消化良好、患者食として陸海軍共に重視	
其の八	防腐剤	消毒用石けん製剤の資料紹介	
其の九	防虫剤	防虫剤の推奨薬品について 南方では蚊取り線香は太さ230倍必要(燻煙濃度を高めるため)	
其の十	ビタミン剤	朝鮮産明太魚眼球抽出ビタミンB1栄養食品化の検討	
其の十一	ホルモン剤	疲労回復法、モルモットでの研究成果、有効なビタミン類の報告	
其の十二	ホルモン剤	トリプトファン(疲労とストレスを軽減させる必須アミノ酸)と栄養失調対策としてのエマルジョン化食用油の注射	
其の十三	防虫剤	マウスを使った防虫剤効果の研究	

表9 『雑書綴』資料㉑【150頁-172頁】携帯口糧並に防虫剤に関する会社、工場調査報告一覧(筆者作成)

〈海水脱塩材〉

『雑書綴』資料㉒【140-149頁】海水脱塩材調査報告

1944(昭和19)年3月30日付。南方の海洋上に点在する島国への兵力動員が増加していたこの時期は、兵士の飲料水の確保は重要であった。

〈軍用犬〉

『雑書綴』資料②⑥【208-213 頁】 軍犬研究試験見学報告

1944（昭和19）年3月4～7日、静岡県内にて陸軍歩兵学校軍犬育成所により実施された研究試験の結果報告である。試験は密林での軍用犬（軍犬）についての次の四項目であった。

- ・ 部隊間の連絡
- ・ 敵の奇襲や潜伏兵に対する警戒
- ・ 敵陣地や敵兵の搜索
- ・ 味方先遣兵位置への部隊の誘導（先導）

結論として、「軍犬は密林内に於いては」、「極めて有効」とあるが、既に南方森林地帯で敵国が軍用犬を使用している、との風説が確信に代わり、その対策の重要性を報告している。

それ以前に、ソ満国境付近においても、敵国軍の軍用犬には関東軍は頭を悩ませていた。そのため、軍用犬の活用法だけではなく、敵の軍用犬対策が敗戦直前まで行われていた。

なお、『雑書綴』に登場する「ホニ号」開発過程でも軍用犬を使用し、「資料蒐集」を行っている【810-817, 824 頁】。その担当者の村上忠雄（第二科第二班長）は同じく【745 頁】で「軍用犬の研究」の報告をしており、軍用犬研究に関する書類は多く見られる。

⑧低照度視力補強材 メラノホーレンホルモン

『雑書綴』資料②⑦【214-223, 622 頁】 低照度視力増強に関する研究

日付不明。暗闇や薄明時の行動の際、視力増強の研究は重要であった。登戸研究所では、脳下垂体中葉のホルモン「メラノホーレンホルモン」に着目し、その低照度視力増強効果を試す実験が行われた。方法として、「点眼」、「皮下注射」を被験者に行った。結論として、低照度では効果を発揮し、さらには皮下注射が最も効果があるとしている。

しかし、実際には内服薬が求められていたため、実地応用は相当困難であり、研究は続行されることとなった。

⑨写真資材関係

登戸研究所では諜報活動には欠かせない写真関係の研究が行われていた。『雑書綴』にもそれに関連する書類が多く綴られている。〔写真・カメラ：第5班〕

『雑書綴』資料②⑧【16 頁】 富士写真フィルム研究所宛 書簡

日付不明。差出人は第二科の写真担当技手^{ぎて}、写真フィルム研究所見学に対する礼状である。文中には、「小型フィルムの性質検査、高感度赤外フィルムの試作ご依頼等につきその用途公表を憚るものに有之候間よろずご承知の事とは候へども念の為申添候」とある。つまり、秘密

戦資材を試作依頼をしながら用途の公表について口外しないよう一文を添えている。

特に、高度な情報収集には遠方が鮮明に撮影できる赤外線フィルムや秘密裏に撮影を行うための撮影機材の小型化は軍にとって重要な問題で、これらを扱う限られた民間企業を巻き込んで研究が行われた。

富士写真フィルム社史『創業25年のあゆみ』（1960年発行）掲載の製品一覧には「太平洋戦争軍用品」として極小写真機用フィルムと各種赤外フィルムが記録されている⁽¹²⁾。

『雑書綴』資料②⑨【462-523頁】 昭和十八年上半期単価契約調書

日付不明。登戸研究所が購入していた物品のリストである。とりわけ、写真関係資材が最も多く、約100品目が537ものサイズ、規格、単位別に細分化され、約30頁にわたる。

『雑書綴』資料③⑩【281頁】 携行品証明書 写真機（ライカ）

1942（昭和17）年6月5日付。ライカは、従来のカメラとは異なり、コンパクトでレンズを交換でき、焦点も合わせやすく、情報収集にも適していた。

当館の所蔵するライカ本体は、そのシリアルナンバーから、この携行品証明書のもと同型のものであると推定される。



図21 資料館所蔵
「バルナックライカb型」
シリアルナンバー：321935、
エルンスト・ライツ社製。

⑩風船爆弾作戦への協力

第一科が中心になり進めていた風船爆弾の研究は、第二科もウイルス搭載計画などで協力していたことがわかる。

『雑書綴』資料③⑪【607頁】 [タイトル、日付なし]

縦軸に高さ、横軸に時間を記録したグラフ用紙である。10分後に9,000m、上昇を続け27分後に最高高度12,500mを指すが、直後から35分後まで10,000m前後を推移、その後は追跡できていない。これは、風船爆弾の軌跡をラジオゾンデで観測したグラフと推定される。

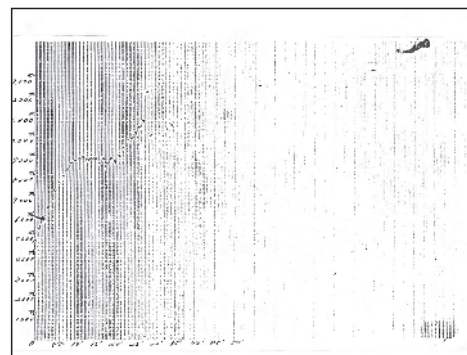


図22 『雑書綴』資料③⑪【607頁】
風船爆弾と思しき軌跡を描いている。

なお、このグラフ用紙の裏には、絵が得意なコトさんがブドウの絵が描いている（昭和19年4月13日付、本稿図6）。反故紙を再利用したのだろうか。

『雑書綴』資料③②【613頁】借用書（石川式攪拌播漬機^{らいかいき} 第24号）

『雑書綴』資料③③【615頁】借用書（米国製モーター）

『雑書綴』資料③④【779頁】久葉少佐^{くば}、川島技師長期派遣に対する礼状

借用書は1944（昭和19）年8月1日～1945（昭和20）年3月末までのもの。礼状は年不詳、12月9日と日付のみ記載。差出は登戸研究所から研究を委嘱された朝鮮総督府家畜衛生研究所長である。この研究所では中村惇治^{じゅんじ}技師が風船爆弾に搭載するための牛疫ウイルスを研究していた。『雑書綴』に登場する借用品は当時の一流品であり、敵国であった米国製モーターもあった。

資料③④の、この研究所へ長期派遣されていた久葉と川島は、登戸研究所第二科第七班所属で、風船爆弾へ搭載予定だった生物化学兵器である牛疫ウイルスを研究していた。この研究内容については、1943（昭和18）年4月から登戸研究所に着任した久葉が、戦後、手記「陸軍第九技術研究所第六^[ママ]研究班研究概要」に残している。〔対動物用細菌：第7班〕

（2）『雑書綴』に見る登戸研究所第二科の変化

『雑書綴』には、登戸研究所第二科の変化を探ることができる書類が含まれている。特に、第三代第二科長・山田桜の就任の前後でその変化が顕著である。

① 1939（昭和14）年～1941（昭和16）年陸軍登戸出張所時代の主要人事

	任 期	氏 名	備考（階級は就任当時）
所 長	1939年9月～終戦	篠田 籙	工兵大佐，陸士26期，参謀本部付，工学博士
第一科長	1942年10月～終戦	草場 季喜	（工兵）*大佐，陸士32期，庶務科長と多摩青年学校 ⁽¹⁷⁾ 長を兼務，元登戸実験場長
第二科長	1939年9月頃？～1941年5月頃	渡辺 扶生	兵技中佐
	1941年5月頃 ⁽¹³⁾ ～1943年6月 ⁽¹⁴⁾	畑尾 正央	（工兵）*中佐，陸士34期 任期は陸軍技術本部第九研究所となった頃からか
	1943年8月～終戦	山田 桜	兵技大佐
第三科長	1939年9月～終戦	山本 憲蔵	主計大佐，主計候補生15期，参謀本部第二部第八課付
第四科長	1941年6月頃 ⁽¹⁵⁾ ～1943年6月 ⁽¹⁶⁾	畑尾 正央	第二科長と同時期に兼務か

※ 1940（昭和15）年以降，兵科は憲兵以外区別がなくなった。

表 10 1939年9月の登戸出張所発足以降の所長と各科長（筆者作成）

旧登戸実験場は登戸出張所に改編後も第一科となり電波研究が継続された。第一科長・草場季喜（東京帝国大学物理学科卒）は、庶務科長と多摩青年学校長を兼ねた。畑尾正央（同電気科卒）が第二代第二科長と第四科〔第一・二科の生産工場〕長を兼ねたのは、無線探査機など諜報器材開発への期待や、電気と秘密戦資材の両方に精通したからこそその人事と考えられる。

一方、第三科は参謀本部主導で他の科とは一線を画していた。

初代第二科長渡辺扶生

兵技中佐 渡辺扶生が第二科長として発行された文書が『雑書綴』に残っている。右の資料では第二代第二科長・畑尾正央が就任していたはずの時期と重複しているが、畑尾は自身を渡辺の後任であったと語っている⁽¹⁸⁾。

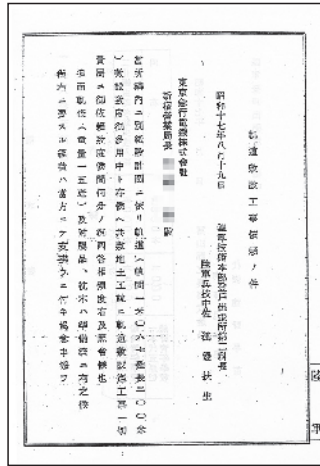


図 23 『雑書綴』参考資料【309頁】
軌道敷設工事依頼ノ件
登戸研究所は南側の高台に軌道（レール）を敷設しロケット砲の研究を行ったという証言がある。

②第二科変化のキーパーソン、第三代第二科長・山田桜

山田桜は第二科長就任直後に科内規律の引き締めを行った。厳しくなる戦局に伴い、どこか穏やかであったのが急に厳しくなったという登戸研究所第二科の様子の変化が『雑書綴』にも記録されている。

山田桜の人物像

山田の研究者としてのキャリアは陸軍科学研究所（陸科研）で始まった。最初は雇員という身分であった。はじめに担当したのは防毒マスクで、特に毒ガス成分を吸着させる活性炭に関しては特許を取得している。1935（昭和10）年には『化学兵器』を著すなど、化学＝毒ガス研究の科学者として活躍した。

部下から見た山田の印象は、「軍人の雰囲気は全く持ち合わせていなかった」が、「服装・敬礼・時間・応対に厳格」という証言が残っている。

1923(大正12)年	3月	東京帝国大学応用化学科卒業
	4月	帝大理系学科卒の研究職雇員として陸科研に就職
1925(大正14)年		陸軍技師として叙位、高等官七等 (雇員から2年で技師になるのは異例の特進)
1935(昭和10)年	5月	単著『化学兵器』出版
1941(昭和16)年	6月	第八陸軍技術研究所（八研）設立と同時に八研へ異動
	12月	武官補充特例により技師を退官、兵技中佐となる
1942(昭和17)年		東京帝国大学より博士号授与（工学）
1943(昭和18)年	8月	登戸研究所第二科長となる 兵技大佐に昇進

表 11 山田桜が登戸研究所第二科長になるまでの略歴
(山田桜「軍用防毒面の研究」(1958年)ほかより、筆者作成)

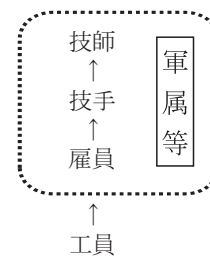


表 12 技術系文官の区分
(参考資料:氏家康裕「旧日本軍における文官等の任用について」(2006年))

『雑書綴』資料③⑤【641頁】勤務中の散髪禁止を周知する文書

年不明，8月21日付。山田桜が科内紀律を正すために出したもの。この文書が出される前には勤務中でも散髪が可能だったことがうかがえる。

研究所間の人的交流

『雑書綴』には陸軍研究所間で資材のやり取りがあったことを示す書類も綴られている。

第二科長に就任する約半年前，山田桜は第八陸軍技術研究所（＝八研）の第三科長であった。八研は化学材料研究などを担当し，登戸研究所にも兵器研究のための材料提供をしていた。

『雑書綴』資料③⑥【419頁】対低温不凍液分譲依頼

1943（昭和18）年1月16日付。登戸研究所第二科長畑尾正央が，当時，第八陸軍技術研究所第三科長山田桜にあてたもの。のちに山田は畑尾の後任として登戸研究所へ異動する。

コラム①陸科研から分かれた研究所

八研と登戸研究所など，研究所間の盛んな人的交流には理由がある。登戸研究所が，第九陸軍技術研究所（＝九研）となった1942年，陸軍科学研究所（陸科研）内の他の部門は，それぞれ，六研，七研，八研となった。これらの研究所はいわば兄弟のような関係で，六研と八研は一時所長が兼務していたり，登戸研究所内に六研，八研の一部が存在していたことがある。

また，登戸研究所は，第二科が開発した毒物「青酸ニトリール」の主原料として純度の高い「液体青酸」を毒ガス研究担当の六研から入手していた。

陸軍科学研究所	第六～九技術研究所は， 陸軍科学研究所を源流として，それぞれ1942年6月に設立	
第一部（物理）	第六陸軍技術研究所（六研）	化学兵器＝毒ガス
第二部（化学）	第七陸軍技術研究所（七研）	物理兵器
※この2部編成は 1937（昭和12） 年以降	第八陸軍技術研究所（八研）	化学材料，化学工芸（ゴムの研究など）
	第九陸軍技術研究所（九研） ＝登戸研究所	秘密戦兵器（個人謀略用）
	※第一～第五陸軍技術研究所は，陸軍技術本部第一～第三部を源流とし，既存の兵器・技術の向上を目指す一般的な研究や規格化などを掌握していた ⁽¹⁹⁾ 。	

表13 陸軍科学研究所を源流とする各研究所の研究内容
（防衛研究所戦史部編『陸軍兵器行政機関の編制・機能 史料集』（1986年）ほかより，筆者作成）

コラム②他の研究所とのすみわけ

登戸研究所も青酸ガスなどの毒ガスを取り扱ったが，これは秘密戦での個人謀略兵器に限定された。一方，六研は大規模作戦用毒ガスの兵器開発を行っていた。

資材として同じものを取り扱いながら、それを使う作戦の方法や規模の違いで、研究のすみわけがなされていた。

第二科長の化学専門家待望論

『雑書綴』資料③⑦【576, 577頁】 研究業務推進に関する意見 昭和十八年六月三十日

この書類では、第二科各班の意見として

- ・参謀本部からの兵器資材要求方法の改善と危険薬品の管理
(第三班 [= 毒性化合物担当] からの意見)
- ・化学専攻の佐官級の第二科長専任 (各班)
などを要求していることがわる。

登戸研究所はこの時期、現地からの喫緊な要求に対し兵器資材納入が遅滞することが多かったようである。この項目が第三班の意見とあることから、この兵器資材は合成毒物と推定される。また、時局柄、物資調達も困難で、危険薬品、油脂類、化学兵器、ボンベ類など危険物を一括で大量購入しており、保管に困っていた。

化学兵器の開発が期待され研究内容も拡大したためか、化学専攻で専任の第二科長が求められた。これは山田桜の就任によって8月に実現した。なお、前任者である畑尾正央は同年6月12日に多摩陸軍技術研究所へ異動している⁽²⁰⁾。

③山田桜 第二科長就任後の登戸研究所の変化

1943(昭和18)年8月、第二科長に山田桜が就任した。

この時期以降、第二科内の規律が厳格化されていく。戦況との関係から以下のような背景が考えられる。

- ・時局の緊迫化による生産能率と士気の向上
- ・秘密戦のそのものの変化により第二科に対する要求が変化、拡大
- ・登戸研究所全体の増員に伴う若年工員の大量採用

この状況で、登戸研究所がどのように変化したのか、『雑書綴』の書類から見ていく。

『雑書綴』資料③⑧【660-663頁】 科内内務巡視の所見と別紙 細部注意事項一覧表

[所見のみ、本紙P. 97 図15]

1943(昭和18)年8月19日付。山田桜が第二科長着任直後に巡視を行い、規律を正す周知文である。注意事項一覧表は細かく、防空対策、化兵(化学兵器)・危険薬品の取扱、火元責任者、清掃についてなど担当班や責任者を名指しで指示している。

『雑書綴』資料③⑨【656-659 頁】科達 [実験室における紀律の確立について]

1943（昭和18）年8月30日付。「軍隊の礼式令」を引用しながら科長名で風紀を取り締まる文書である。

確実な敬礼・秘密保持・整理整頓・掃除の実行，早すぎる退庁準備・休憩時間後の雑談・研究室での新聞普通雑誌閲覧の禁止，公私の区分徹底，鍵札の整備，危険防止のための防毒面（ガスマスク）・メガネ使用の励行が指示されている。四番目の項目，班員の執務態度については，「上官より指揮なきを理由として懈怠^{かいたい}するか如きは正に頭脳無き廢人と言ふべし」と強い語調で戒めている。

『雑書綴』資料④⑩【691 頁】 四月中における無施錠，開放状況調査書

年不明。前後のページから1944（昭和19）年4月末に作成されたものと思われる。

『雑書綴』資料④⑪【795，796 頁】 第二科特殊材料取扱内規

1944（昭和19）年3月28日改正。特殊材料の管理の厳格化を規定している。特殊材料のリストの付表は綴られておらず，何がその特殊材料にあたるのかは不明のままである。

管理方法の指示として，「保管主任者の配置」，「特殊材料は通常錠前を有する堅牢なる箱又は戸棚に収納」とある。資料館には，第二科第一班長・伴繁雄が残した「三重戸棚鍵」扉の鍵が収蔵されているが，この内規にあるような厳重管理を要する特殊材料の保管のためのものと考えられる。



図24 三重戸棚鍵（資料館所蔵）

④登戸研究所規程類

登戸研究所の職場環境を示す書類も多く残っている。

『雑書綴』資料④⑫【341，343，344 頁】登戸出張所教育規程

『雑書綴』資料④⑬【381-385 頁】不就業日支給金額表 ※勤務日以外の日給支給表。登戸研究所の手厚い待遇がわかる。

『雑書綴』資料④⑭【536，537 頁】健康保護者取扱規程

『雑書綴』資料④⑮【717，718 頁】陸軍共済組合の目的と組織

『雑書綴』資料④⑯【567-574 頁】日直勤務

『雑書綴』資料④⑰【575 頁】駆付者 ※研究所近隣在住の勤務者が研究所で非常事態の際に駆けつけることを定めた規程。

これらの資料も，元勤務員らの証言を裏付け，総合的に当時の勤務環境を示す貴重な資料で

ある。

おわりに

少女が残した記録，その内容はたいしたものではないのではないか——しかしそれは誤りであった。

登戸研究所の第二科が扱っていた毒物，外地の秘密戦との関係を示す文書など，この『雑書綴』の書類を読み解くと，第二科が陸軍の謀略戦の中心であったこと，また研究内容だけでなく，登戸研究所の職場としての様子もわかるようになった。『雑書綴』から判明したことは，この資料館の第三展示室の土台にもなっている。

『雑書綴』がなければ登戸研究所の実態は依然謎のままだったであろう。『雑書綴』を大切に保管されていた関コトさんご家族，はじめて『雑書綴』調査を行った渡辺賢二先生と中原市民学級の皆様の努力にあらためて感謝申し上げる。

今回の企画展では約1,000枚もの書類のうち，ほんの一部を取り上げたのみであるが，資料館第三展示室では複製を本企画展中に追加したインデックスと併せて常時閲覧可能である。

謝辞

本稿は，2019年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館主催第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録—陸軍登戸実験場開設80年—」の記録を目的として，企画展の展示内容にその後の研究成果をふまえて加筆・修正したものである。

この企画展に係る調査，ならびに本稿執筆に際し，下記の皆様・各機関には多大なるご協力とご後援をいただいた。ここに記し，あらためて感謝申し上げます。(敬称略・個人-機関の五十音順)

協力 小林郁久 / 松野誠也 / お茶の水女子大学附属図書館 / 防衛省防衛研究所史料閲覧室

後援 川崎市 / 川崎市教育委員会

〔注〕

(1) 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』(教育史料出版会，1989年) p. 126。

(2) 川崎女性史編さん委員会編『多摩の流れにときを紡ぐ—別冊聞き集』(ぎょうせい，1990年) pp. 211-215。

コトさん（執筆時姓：小林）の回想「陸軍登戸研究所でタイプを」より、第二科や自分の仕事について抜粋（一部簡略化等変更を加えています。）

〈登戸研究所に勤め始めたとき〉

- ・昭和十五年に高等科を卒業して研究所に入らないかとさそわれた。叔父が勤めていた。
- ・試験を受けて入った。学校の成績、素行、健康状態、家族の思想など憲兵が調査した。いろいろな調査があり、一か月くらいかかった。
- ・その頃は研究所がどんなことをしているか知らなかった。ただ勤めたいということで入った。
- ・わたしは二科の庶務。庶務は小使いみたいな感じ。傭人という身分だった。

〈タイピスト学校とタイピストの仕事〉

- ・しばらくして「行きかかったらタイピスト学校に行かせてあげるよ」といわれた。
- ・高等小学校を卒業しただけだったので不安があり、勉強したいという気持ちがあった。それで昭和十六年の初めころ、渋谷の青山タイピスト学院に八か月くらい毎日通った。
- ・帰りは九時ごろ。駅まで遠く、母が弟たちを生田の駅まで迎えに寄こしてくれた。
- ・研究所からは学校の費用は出なかった。月謝、教材、交通費は全部自分持ち。
- ・時間だけは少し早めに、四時ころから学校に行かせてくれた。
- ・月給は最初、十六円三〇銭。辞めるころは二三円くらい。
- ・タイプを打てるようになると、科全体の命令や科の会報なんかを打たせてもらった。時間は決まっていたが定時で帰る人はいなかった。急ぎのタイプがあると夜になってもやっていた。深夜になっても軍人さんが横についていて、そういう時は生田の駅のほうに出て栗谷を通して帰った。一人ですごく怖かった。いつもは今の西三田団地になっている原っぱを通った。
- ・残業手当がつかないとか、食事のこととかは考えなかった。夕食を食べないで夜までやった。

〈第二科のこと〉

- ・人が足りず、技術者は各大学（旧制専門学校）から募集し、あちこちから来ていた。
- ・女の人はわりと近くの人が多かった。
- ・危険作業とか、ガス類だとかをやっていた。耐風耐水マッチもやっていた。そこには二科の庶務の女の子たちが何人かずつ手伝いに行っていた。
- ・研究所では運動会や遠足なんかもあった。科ごとに、昇仙峡とか鳩の巣とかに行った。ピンポンをやる場所があった。昼休みとか職員同士でやった。シングルの試合ばかりだった。

〈終戦と残務処理〉

- ・終戦前日に、あしたは大事な放送があると聞いた。軍人が泣いていた。何かと思った。
- ・そんな時に終戦になるとはわからなかった、将校が泣いていたのでこれはただごとではないと思った。自決するなんて人はいなかった。勝つだけしか教えられてこなかったため負けたことが全然信じられなかった。
- ・残務処理などで八月いっぱいくらい通っていた。タイプを打つ仕事でなく庶務関係の書類を燃やしたりなどをした。
- ・残った物資を分けるということもした。ズックの靴になるような布などは分けてくれた。サッカーなどたくさん研究室にあったがくれなかった。将校の履く新しいピカピカの長靴がいっぱいあった。それらがどうなったかは知らない。
- ・退職金は出なかった。解散式も何もなかった。田舎に帰る人などがいた。
- ・誰かにいわれたわけではなく、自分なりにだいたい整理が終わったので残務整理を終えた。タイプライターを欲しいと言ったが、駄目だといわれ、くれなかった。菅沼式というタイプライターだった。タイプとはそれきりで縁が切れてしまった。
- ・「雑書綴」という名はわたしが勝手につけた。いろんな文書の打ち方を早く覚えようと思い、表紙をつけて綴じておいた。極秘文書なんかはカーボン紙ごと焼却箱に捨てさせられたので、綴っておけたのはそんなに厳しく言われなかったもの。
- ・退職に際し、五年間の精魂こめた仕事の思い出を持っていたいと思った。二科では何も言われなかったが、門衛には持ち出し禁止といわれた。しかし、仕事の思い出に、といたら許してくれた。そのときちょうど二〇歳だった。

- (3) 渡辺賢二氏による調査によれば、この守衛は地元の有力者であり、持ち出し可否の判断を下すことができた。
- (4) 山田桜『化学兵器』改訂増補（共立出版、第五版 1942年）目次。
- (5) 伴繁雄の研究は陸軍科学研究所時代から秘密戦兵器開発の中心であり研究内容が多岐にわたる。また開発した兵器を使用する側である陸軍中野学校や特務機関などからの要求にも応えた。
- (6) 警視庁捜査一課編『甲斐捜査手記』第四巻の山田桜をはじめとする登戸研究所元勤務員らに対する聞き取りからは、第二科は村上による毒の抽出グループと土方による兵器化グループとに役割分担がなされていたと読み取れる。
- (7) 第三班長（毒性化合物担当）が開発に関わった合成毒物兵器と考えられる。『雑書綴』中、他の資料より、「ホニ号」開発の資料収集のために第二班長（犬迷い剤担当）が札幌へ出張し①軍用犬を特殊作業に従事し、②動物を専門とする北大教授らに研究を委嘱したことがわかることから、「ホニ号」は動物に作用する兵器であったことがうかがえる。
- (8) 前掲、『甲斐捜査手記』第五巻で伴繁雄は、「毒物は兵器であるから兵器行政本部の手を経て九研〔登戸研究所〕から特殊部隊に廻るのが本来である」と兵器化された毒物の製造とその分配方法に言及している。
- (9) 地形図などをもとに軍事行動に必要な情報を朱字などで加筆したもの。その現地調査は敵に見つからないよう、極秘で測量や情報収集が行われた。歩測や目測により作成されたものもある。
- (10) 中野校友会編『陸軍中野学校』（非売品、1978年）p.94。
- (11) 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1989年）p.103。
- (12) 富士写真フイルム社史『創業25年のあゆみ』（富士写真フイルム、1960年）p.589。
- (13) 伴繁雄『登戸研究所の真実』（芙蓉書房、2001年）pp.81, 82、および斎藤充功『謀略戦』（時事通信社、1982年）p.218の畑尾本人による日米開戦前の人体実験に同行しているという証言を軸に考え、ここでは5月頃には就任していたものとした。
- (14) 防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵『昭和19年9月1日調 陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』によれば、1943（昭和18）年6月12日に多摩陸軍技術研究所設立と同時に異動している。
- (15) 注13に同じ。
- (16) 注14に同じ。
- (17) 登戸研究所内に設置され、若手勤務員の軍事教練・心身の教育を行った。正式名称は戸山青年学校登戸分校。
- (18) 前掲、『謀略戦』p.218。
- (19) 防衛研究所戦史部編『陸軍兵器行政機関の編制・機能 史料集』（1986年）pp.87, 88。
- (20) 注14に同じ。

〔参考文献〕（編著者五十音順、刊行年順）

[全般]

- 稲田郷土史会編「陸軍登戸研究所特集」（稲田郷土史会機関誌『あゆたか』第50号、2012年）
川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』（教育史料出版会、1989年）
川崎女性史編さん委員会編『多摩の流れにときを紡ぐ—別冊聞き集』（ぎょうせい、1990年）
木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
木下健蔵『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』（文芸社、2016年）
斎藤充功『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社、1987年）
中野校友会編『陸軍中野学校』（中野校友会、1978年）
日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』（図書出版社、1977年）
秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』（東京大学出版会、1991年）
防衛研究所戦史部編『陸軍兵器行政機関の編制・機能 史料集』（1986年）
松野誠也「第九陸軍技術研究の研究・開発に協力した科学者・技術者に関する一考察」
（『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第3号、2017年〔非売品、2019年8月現在
<https://www.meiji.ac.jp/noborito/report/6t5h7p00000ex70c-att/6t5h7p00000q1lay.pdf>より閲覧可）

- 陸軍科学研究所編『陸軍科学研究所歴史』巻之三（陸軍科学研究所，1933年）
陸軍科学研究所編『陸軍科学研究所歴史』巻之三（別冊）（陸軍科学研究所，1933年）
渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館，2012年）
[第二科の研究内容に関するもの]
〈化学兵器・毒ガス〉
化学兵器関係者編『本邦化学兵器技術史 年表』（化学兵器関係者編『本邦化学兵器技術史』，厚生省引揚援護局史料室，1958年）
河村豊「日本における化学兵器の研究開発について—科学技術動員の視点から—」（『イル・サジアトーレ』No.29，2000年，https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=42176，2019年10月11日閲覧）
警視庁捜査一課編『甲斐捜査手記』（平沢貞通弁護士所蔵，非公開）
常石敬一『謀略のクロスロード』（日本評論社，2002年）
松野誠也『日本の毒ガス兵器』（凱風社，2005年）
山田桜「軍用活性炭に就て」（工業化学会編『工業化学雑誌』第37巻第6号，1934年）
山田桜『化学兵器』改訂増補（共立出版，初版1935年，再版1938年，第五版1942年）
山田桜「兵器材料と有機合成化学工業」（有機合成化学協会編『有機合成化学協会誌』第1巻第1号，1943年）
山田桜「軍用防毒面類の研究」（化学兵器関係者編『本邦化学兵器技術史』，厚生省引揚援護局史料室，1958年）*
※防衛省防衛研究所蔵書からは該当頁が欠損し閲覧できなかったが，松野誠也氏より複写の提供を受けた。
〈軍用犬〉
内田亨「犬の嗅覚について」（帝国軍用犬協会編『軍用犬』第9巻第4号，1940年）
〈写真・フィルム・カメラ〉
小西六写真工業株式会社社史編纂室編『写真とともに百年』（小西六写真工業，1973年）
富士写真フイルム株式会社『創業25年のあゆみ』（富士写真フイルム，1960年）
〈兵要地誌図〉
外邦図研究グループ編『外邦図研究ニュースレター』No.1（大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室，2003年）ほか（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/newsletter> 1/，2019年9月27日閲覧）
小林茂『近代日本の地図作成と太平洋地域—外邦図へのアプローチ』（大阪大学出版会，2009年）
測量・地図百年史編集委員会編『測量・地図百年史』（国土地理院，1970年）
神谷誠編『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録—岡さのへち会記念文集—』（創栄出版，1995年）
〈防虫剤〉
長瀬誠「除虫菊の成分」（『科学画報』第31巻第8号，誠文堂新光社，1942年）
長瀬誠「蚊取り線香の科学」（『科学画報』第32巻第10号，誠文堂新光社，1943年）
〈防諜・諜報・憲兵〉
岡部牧夫『満州国』（講談社，2007年）
全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲兵正史』（全国憲友会連合会本部，1976年）
荻野富士夫「関東憲兵隊の対ソ防諜」（2017年7月1日『諜報研究会』レジュメ
<http://www.npointelligence.com/NPO-Intelligence/study/pic1904.pdf> 2019年8月15日閲覧）
防衛庁防衛研修所戦史室『関東軍1』（朝雲新聞社，1969年）
防衛庁防衛研修所戦史室『関東軍2』（朝雲新聞社，1974年）
[その他]
氏家康裕「旧日本陸軍における文官等の任用について—判任文官を中心に—」（『防衛研究所紀要』第8巻第2号，2006年，http://www.nids.mod.go.jp/publication/kiyo/pdf/bulletin_j8_4_2.pdf，2019年9月27日閲覧）
大堀宙・山口隆行・阿部靖子「登戸研究所をめぐる文献紹介」（駿台史学会編『駿台史学』第141号，2011年）
沢井実『近代日本の研究開発体制』（名古屋大学出版会，2012年）
戦前期官僚制研究会編／秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会，1981年）
花岡敬太郎「映像メディアにおける登戸研究所の紹介状況」（駿台史学会編『駿台史学』第141号，2011年）
星合正治『電子管Ⅲ・放電管』（オーム社，1938年）
陸軍省編『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』各種（防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵）

第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録—陸軍登戸出張所開設80年—」展示資料一覧

本稿図表番号	資料名	所蔵者	資料館所蔵 資料番号
図1	『雑書綴』	小林郁久氏	—
図9	勅諭下賜五十周年 ^(年) 記念 文鎮	小林郁久氏	—
図10	中原平和学級のアンケート回答（関コトさん）	登戸研究所資料館	71
図11	「普通恩給請求書類」	登戸研究所資料館	1426-5
図12	「出張行程表提出依頼状」	登戸研究所資料館	1769
本誌 p. 91	渡辺賢二氏作成「雑書綴」メモ	登戸研究所資料館	1932
本稿掲載なし	「キノコ随想」原稿（複写）	登戸研究所資料館	154
図17	『日支国語辞典新辞林』	登戸研究所資料館	1933
図18	憲兵関係資料 『塚本・辻少佐述 捜査法・法医学綴』	登戸研究所資料館	186
図18, 図19	憲兵関係資料 『大石中佐述 服務関係綴』	登戸研究所資料館	174
図20	「兵要地誌図 パリ島」（複写）	お茶の水女子大学附属図書館	—
本稿掲載なし	「兵要地誌図 チモール島（東部）」（複写）	お茶の水女子大学附属図書館	—
本稿掲載なし	「久葉手記」（複写）	登戸研究所資料館	512
本稿掲載なし	山田桜『化学兵器』	登戸研究所資料館	518
図24	三重戸棚鍵	登戸研究所資料館	916